

# ゲーベンククリームの使い方

高岡駅南クリニック 塚田邦夫

## ゲーベンククリームの症例を検討

創傷・褥創に対し、よく使うものとしてゲーベンククリームがありますが、過去5年間にゲーベンククリームを使った後、経過を見ることができた症例を全て抽出し、どのような例に使っていたのかを検証してみました。

## ゲーベンククリームの特徴

ゲーベンククリームは、主成分である銀による殺菌効果を持つクリーム剤です。

銀はDNAに取り込まれて細胞増殖を抑制します。例えば2時間接触することで細胞増殖は抑制されます。ところが細胞自体に対してはそれほど障害作用がなく、4時間細胞に接触させても細胞自体には影響が少ないと言われています。

これを考えると、増殖の早い細胞にはダメージが多く、増殖速度の遅い細胞には影響が少ないと言えます。つまり増殖の早い細菌への障害は強く、それと比べると増殖の遅い白血球などの炎症性細胞や、線維芽細胞などへの影響は抑えることができます。その結果細菌に対して選択的な細胞障害作用を期待できる薬剤と言えます。

この細菌に対する障害作用を意識した使い方としては、次々と増殖期に入る細菌に影響を与えるために、たっぶりのクリーム剤をできるだけ長時間創面に接触させることが、ドレッシング法のコツと言えるでしょう。

## どのような例に使われたか

ゲーベンククリームを使った28の褥創、5例の熱傷、2例の皮膚潰瘍について表にまとめると以下のようなものでした。

褥創	褥創周囲皮膚に感染がみられた創 動脈閉塞のある下肢の褥創・創傷 壊死組織の自己融解を安全に行いたい時 粘着性のものが使えない状況下：特殊例
熱傷・皮膚潰瘍	低温熱傷などで、ハイドロコロイドドレッシング材使用で壊死が進行した場合 創面が汚れている場合

## 褥創周囲皮膚の感染対策

褥瘡の治療中、創周囲皮膚に細菌感染や真菌感染が時々発症します。このようになると粘着性ドレッシング材は使用できなくなり、また患者の痛みやかゆみの訴えも出て、介護する方にとっても悲惨さが出て来ます。

このような時、ゲーベンククリームを褥創部および創周囲皮膚にたっぶりと塗布します。そのうえからオムツや尿取りパッドを直接カバーします。オムツなどが排出物で汚れて交換する時、再びゲーベンククリームを塗布します。このようにすると、1~2週間以内に皮膚感染は治癒するので、その後は粘着性のドレッシング剤を再び使用できるようになります。

以下に症例の一部を紹介いたします。

いずれもゲーベンククリーム使用にて、浅い褥瘡と皮膚感染は治癒しました。

80歳代女性, 仙骨部褥創

## 褥創症例 1

5

6週間後

4か月後

- ・ハイドロコロイドドレッシング材を使っていて, 皮膚感染した症例に対し, ケーパソクリーム塗布にて感染のコントロールと創周囲皮膚を改善
- ・ケーパソクリーム塗布しオムツを直接使用

80歳代男性, パーキンソン病

## 褥創症例 9

13

1か月後

抗真菌剤+ケーパソクリーム

4か月後

- ・仙骨部褥創と肛門周囲皮膚感染に対し, ケーパソクリームと抗真菌クリームを使用
- ・1か月後には, 褥創および皮膚の状態は改善傾向にあった
- ・治療開始4か月後には, 褥創および皮膚は治癒した

### 動脈閉塞のある足褥創・創傷

足に動脈閉塞があり壊死を伴う潰瘍を認める場合、多くは乾燥ミイラ化を目指されます。乾燥させることで細菌の接着・増殖を抑制しようという意図からです。しかし、創面の乾燥は、いかなる場合でも壊死部に接した細胞を乾燥から死なせ、壊死部の拡大につながります。さらに、乾燥化によって壊死部に接した神経末端は、乾燥刺激によって激しい疼痛を生じます。

かといって、ハイドロコロイドドレッシング材や、フィルム材を用いて湿潤状態を作ると、潰瘍部は血流が少なく感染に弱いため、ほとんど確実に感染創を形成します。そこでゲーベンクリームを使用すると、ゲーベンクリームの特性である、乾燥部には補水し、滲出液はある程度吸収する働きから、創面に湿潤状態が形成されます。危険とされた湿潤状態ではありますが、銀を含んでいるため、細菌の増殖は抑制され、同時に線維芽細胞や血管内皮細胞、炎症性細胞に対する悪影響は最小限になります。その結果、湿潤状態ではあるものの細菌感染は抑制されます。実際使ってみると、壊死組織は浸軟し、壊死部は周囲組織から延びる肉芽でしだいに浮き上がり、それと共にさらにその周囲に表皮化がゆっくりと進んできます。とは言え、細菌増殖抑制効果はそれほど強いものではないため、感染徴候の出るものもあります。そのような場合、いろいろ使ったものでは、ユーパスタ軟膏を用い、食品用ラップで覆う方法が有効でした。ユーパスタ軟膏単独では、乾燥はさらに進行するし、かといってラップ単独ではあっという間に感染を起こします。この二つを組み合わせることで、創面にはユーパスタの高浸透圧により滲出液を吸って湿潤な状態を作り、それをラップが逃さずとどめます。ヨードによる細胞障害作用は強いのですが、高浸透圧のため徐放性にしかヨードが出てこないためか、創面では肉芽が少しずつ周囲から盛り上がり、壊死組織を遊離してきます。このような症例を紹介いたします。

23

**90歳代女性、左踵部褥創** **褥創症例 18**

- ・ 踵褥瘡に対し、感染と血行不良が疑われ、ゲーベンクリーム+穴開きフィルム法を選択
- ・ 1ヶ月後でもまだ厚い壊死があるため、ユーパスタ軟膏+穴開きフィルム法に変更
- ・ 治療開始5ヶ月後には、略治

1ヶ月後

ユーパスタ+穴開きフィルム法

4ヶ月後

5ヶ月後

Ekinan Clinic

### 褥創の壊死組織の自己融解を促進

ゲーベンクリームは補水効果があり、硬い黒色壊死や、あるいは軟らかい黄色壊死でも、ゲーベンクリームをたっぷり用いることで壊死組織は軟化し自己融解していきます。ゲーベンクリームを創面に用い、18G 注射針で穴を開けたフィルム材で密閉します。その上からオムツないし尿取りパッドをあてることで、過剰なゲーベンクリームや浸出液はフィルムに開けた穴から出て来ます。それを尿取りパッドが吸うことで、創周囲皮膚の浸軟を予防します。また、注射針で穴を開けることでフィルム材が剥がれず皮膚に接着し続けることで、皮膚は乾燥を保つと共に、外部からの創汚染を予防します。

典型的な例を以下に提示します。



#### 特殊例；褥創に粘着性のものを使えない時

認知機能が低下した人など、粘着性ドレッシング材を貼付してもすぐに剥がしてしまう場合があります。このような時、ゲーベンクリームを多めに塗布し、オムツや尿取りパッドなど、いつもと同じ下着類を着けてもらうことで褥創の治療が可能となります。

粘着性装具を使用した結果、毛囊炎などでかゆくなった場合にこのような状態が発生します。ゲーベンクリームは毛囊炎にも効果があり、褥創周囲皮膚感染を改善すると共に、褥創も治癒させることができます。

#### 低温熱傷などでハイドロコロイドドレッシング材使用にて壊死が進行し疼痛を訴える時

低温熱傷を含め熱傷に対するドレッシング材の第1選択は、ハイドロコロイドドレッシング材です。この点に関しては詳しく書きませんので、以前の講義録を参照して下さい。

低温熱傷では、当初かなり創は軽く見え、数日で治癒すると思われるくらいですが、しだいに皮膚および皮下の壊死がはっきりとしていき、1~2週間の間は、いかなる治療にも抵抗して悪化し、痛みも強くなります。痛みが出現する時は壊死の下で感染がおこっているとも考えられます。

低温熱傷でも第1選択は、ハイドロコロイドドレッシング材を使います。しかし、しだいに壊死が深くなるだけでなく痛みを訴える時は、感染抑制効果のあるゲーベンクリームを使用します。ゲーベンクリーム使用にて痛みが無くなります。痛みが無くなり感染の危険がないと判断すれば、再びハイドロコロイドドレッシング材に戻します。

そのような例を提示します。

- ・ 左足背の低温熱傷を当初ハイドロコロイドドレッシング材を選択
- ・ 3日後, 壊死進行にてゲーベンクリームに変更
- ・ 9日後, ハイドロコロイドドレッシング材に戻した
- ・ ハイドロコロイドドレッシング材使用にて, 治療開始3.5カ月後に治癒

以下の例は、低温熱傷ではなく油による熱傷にキズドライが使われ、疼痛のため受診されました。まずキズドライを除去しますが異物として残るため、ゲーベンクリームを使用します。創面を湿潤にすると共に異物の除去作用を期待します。5日目には創が清浄化したことを確認し、ハイドロコロイドドレッシング材にすることで、全治療期間12日で略治の状態になりました。

- ・ 前日フライパンの油で受傷し, キズドライを塗布。痛くて来院
- ・ 異物を洗浄除去後, ゲーベンクリームを塗布し吸収パットで覆った
- ・ 5日後, 創の状態改善にてハイドロコロイドドレッシング材を貼付し, 12日後に略治

## まとめ

過去 5 年間のゲーベンクリーム使用例を顧みて、ゲーベンクリームの特徴がよく分かりました。壊死組織の自己融解促進・創周囲皮膚感染対策・動脈閉塞のある下肢潰瘍・低温熱傷など痛みのある壊死組織に有用でした。

ゲーベンクリームは創傷治癒に有用な細胞への障害作用は少ないとはいえ、長く使うと細胞の活性は低下していくため、使用期間は必要最小限にとどめることが重要と考えます。

したがって、下肢の動脈閉塞疾患を除き、感染徴候や汚れた状態が無くなれば、ハイドロコロイドドレッシング材などに変更することが大切でしょう。